

Blackwood's Edinburgh Magazine **に見る**1850年代
の`sensation` : Wilkie Collins **の Basil から**
The Woman in White **へ**

著者	橋野 朋子
雑誌名	研究論集
巻	97
ページ	31-42
発行年	2013-03
URL	http://doi.org/10.18956/00006079

Blackwood's Edinburgh Magazine に見る1850年代の‘sensation’

— Wilkie Collins の *Basil* から *The Woman in White* へ —

橋 野 朋 子

要 旨

センセーション小説は1860年代初頭のヴィクトリア朝イギリスにおいてにわかに流行し、その流行は当時の多くの雑誌記事において大いに議論され批判された。“sensation novel (fiction)”という用語自体は1860年頃から雑誌記事に見受けられるようになるのだが、1850年代の雑誌記事に目を向けると、“sensation”という言葉がすでにトピカルな言葉として扱われていたことが見えてくる。E. S. Dallas は、センセーション小説の流行を引き起こした Wilkie Collins の *The Woman in White* (1859-1860) が連載されるよりも半年ほど前に、*Blackwood's Edinburgh Magazine* の記事において “we should fly thought, we should cultivate sensation” と述べている。また、1855年、Margaret Oliphant は同誌において Collins の初期の代表作 *Basil* に触れて、“The ‘sensation’ which it is the design of Mr Wilkie Collins [...]” と引用符を用いて使用している。本論は、主として *Blackwood's Edinburgh Magazine* の1850年代の記事を通して、“sensation” という言葉が1860年代初頭のセンセーション小説の流行のはるか前から様々な領域においていかに社会的に注目されていたかを検証していく。

キーワード：sensation、Wilkie Collins、*Blackwood's Edinburgh Magazine*、*Basil*
The Woman in White

はじめに

センセーション小説研究の先駆的論文である ‘The Lighter Reading of the Eighteen-Sixties’ (1969) において Katherine Tillotson は、‘sensation novel’ という用語が用いられた最も早い事例が1861年9月の *The Sixpenny Magazine* の記事に見られると述べている¹⁾。本論の目的は、その ‘sensation novel’ という用語が作られる素地として、‘sensation’ という言葉が既に1850年代後半にかけて社会的な現象を象徴する用語となっていたことを雑誌 *Blackwood's Edinburgh Magazine* を例にとりて検証し、センセーション小説の先駆者的存在である Wilkie Collins の初期の代表作 *Basil* (1852) と1860年代始めのセンセーション小説の流行に火をつけた *The Woman in White* (1859-60) における ‘sensation’ の性質とその推移を考察することにある。

‘Modern Novelists – great and small’ と題した1855年5月の *Blackwood’s Edinburgh Magazine* (以降 *Blackwood’s* と表記) の記事で Margaret Oliphant は Collins の *Basil* に触れて次のように述べている。

The ‘sensation’ which it is the design of Mr Wilkie Collins to raise in our monotonous bosom, is – horror.²⁾

‘sensation’ の言葉に引用符が用いられており、1850年代、‘sensation’ という言葉に何らかの社会的意味が付与されていたことが推察される。また、‘Popular Literature – the periodical press’ と題した1859年1月の *Blackwood’s* の記事では、E.S.Dallas が、「我われは思考を離れ感覚を培うべきだ」(we should fly thought, and cultivate sensation)³⁾ という一節を記している。*The Woman in White* が雑誌 *All the Year Round* に連載されてセンセーション小説の流行をもたらすのはこの記事の半年ほど後のことになるので、それに先駆けて Dallas がこのように、‘sensation’ の必要性を説いているのは興味深い。

1860年代初頭にわかみに出現したセンセーション小説の流行に先駆けて ‘sensation’ という言葉が何らかの社会的意味合いを持っていたことを示すこれら二つの記事がどちらも *Blackwood’s* に掲載されたものであることから、‘sensation’ の単語が同誌の1850年代の記事すべてを通してどのように使われているかを調べてみることにした。以下はそこから見えてきた ‘sensation’ という言葉をめぐる1850年代ヴィクトリア朝イギリス社会の検証である。

1. 1850年代に見られる ‘sensation’ 現象

‘Adam Bede’ と題した1859年4月の *Blackwood’s* の記事は同年出版の George Eliot の *Adam Bede* の書評記事であるが、その中で、筆者の William Lucas Collins は、1857年に出版された Thomas Hughes 著の *Tom Brown’s School Days* (Macmillan 出版) の大いなる人気に触れて次のように述べている。

They almost realised in its pages that for which the jaded appetites of our literary age must so often sigh – a new sensation.⁴⁾

この一節はまさに、読者大衆がセンセーション小説をむさぼり読む社会風潮に警鐘を鳴らした1860年代始めの論争を想起させるが、これは *The Woman in White* が連載される以前の記事である。このことから、いわゆる1860年代のセンセーション小説の流行が始まる以前から小説

における「センセーション現象」がすでに社会的に認識されていたことが分かる。また、この記事の書評対象となっている *Adam Bede* の作品中にも、あらゆる事柄で新しい刺激を追い求める社会的傾向を伝える一節がある。

Even Idleness is eager now – eager for amusement: prone to excursion-trains, art museums, periodical literature, and exciting novels: prone even to scientific theorizing, and cursory peeps through microscopes. Old Leisure was quite a different personage: he only read one newspaper, innocent of leaders, and was free from that periodicity of sensations which we call post-time.⁵⁾

しかし、Margaret Oliphant が Collins の *Basil* に触れた際に引用符を付して 'sensation' を用いたのは1855年であり、時期的にさらにさかのぼる。この点に関しても当時の *Blackwood's* の記事を参考にすることができる。'Real and Ideal Beauty' と題した1853年12月の記事で、著者の R. H. Petterson は、美は「感覚の領域」(the sphere of Sensation) だけにとどめずに、それを「知力という奥の神殿」(the inner shrine of the Intellect) で反芻して堪能するべきであると主張し、当時の芸術におけるセンセーションナリズムを批判している。

[...] by transferring the emotion of Beautiful from the sphere of Feeling into that of the Understanding, we at once filter the emotion of its disturbing qualities, and render ourselves longer sensitive to its delightful influence. [...] And by giving the emotion a place in the inner shrine of the Intellect in addition to its primal place in the sphere of Sensation, we render ourselves in a great measure independent of that sensuous susceptibility upon which the enjoyment of Beauty so much depends.⁶⁾

また、'Manchester Exhibition of Art-Treasures' と題した1857年8月の *Blackwood's* の記事で著者の J. B. Atkinson は、ラファエロ前派の画風が新奇さゆえに世間の注目を集めている「絵画的センセーション」(pictorial sensation) に触れ、「感覚的なものを求める不健全な欲求」(an unhealthy craving for mental sensation) と批判している⁷⁾。センセーション小説の流行をめぐる1860年代始めに見られる論調が絵画においてはすでに1850年代中葉に展開されていたと言える。Oliphant が1855年の記事で 'sensation' に引用符を付した背景には、このように 'sensation' という言葉が社会的用語として浸透していたことがあったと言えよう。

2. *Basil*における ‘sensation’ とその評価

本論冒頭の引用で Oliphant は ‘sensation’ に引用符を付して「Collins が *Basil* において読者に与えようと意図した『センセーション』とは『恐怖』である」と述べているが、ここで *Basil* における ‘sensation’ を具体的に検証していく。

Basil は1852年に出版された Collins の初期の代表作である。注目すべきは、‘sensation’ の単語が作品中20回ほども使われていることであり、しかもその多くが「身体的」な意味合いで用いられている点にある。OED は ‘sensation’ を、(1)「五感の機能としての感覚」(2)「心理的・感情的な感覚」(3)「社会的現象としての刺激的感覚」と大きく三つの定義に分類している。1850年代の *Blackwood's* の記事全体を通して ‘sensation’ の言葉の使われ方を見てみると、二番目や三番目の定義における使用例は、sensation of terror / sensation of awe / sensation of relief などのフレーズや、a great sensation / a considerable sensation / a prodigious sensation などのフレーズで記事のジャンルを問わず見受けられるのに対して、一番目の身体的機能での使用例は生理学的なテーマを扱った記事に集中している。

身体的な機能としての ‘sensation’ の説明が19世紀強い関心を集めていたようで、人間の体の仕組みを説明しようとする生理学的解説論文は、19世紀前半から専門誌に限らず *Blackwood's* などの一般雑誌にも登場しており、G. H. Lewes は1850年代に *Blackwood's* に20本におよぶ生理学的エッセイを寄せ⁸⁾、1859年に *The Philosophy of Common Life* (William Blackwood and Sons 出版) を出版している。また彼は1876年4月、心理学の専門誌である *Mind* に ‘What is Sensation?’ と題した論文を発表し、生理学と心理学における用語としての ‘sensation’ の認識の違いを議論している。現在科学雑誌としてその名も名高い *Nature* には、1869年12月、医師の H. C. Bastian が ‘Sensation and Perception’ と題した論文を寄せている。‘sensation’ という言葉は、19世紀、生理学の分野でも注目される言葉であったようである。Collins は、‘My sensation wanted repose; my thought wanted collecting’⁹⁾、‘Thought and sensations [...] rioted within me in perfect liberation from all control’¹⁰⁾、‘I sought the clue to her thoughts and sensations’¹¹⁾ など、*Basil* の様々な箇所でも ‘sensation’ という言葉を ‘thought’ と対比的に用いているが、それは当時の生理学的文献が脳の仕組みを「思考」(thought) と「感覚」(sensation) の二つの領域に分けて解説しているのを反映しているように思われる。特に主人公 Basil が意識を取り戻す過程を描いたシーンでは生理学的な分析描写が顕著である。主人公 Basil は「完全な忘却状態」(utter oblivion) の後に「意識が頭の中で閃光を放った」(consciousness flashed like light on my mind) と述べ¹²⁾、「まず感覚が戻り、そして思考力が戻り、そして全体像がつかめた」(I had sensations, I had thought, I had visions)¹³⁾ と分析し、その過程を次のように詳述する。

My first sensation [...] was of a terrible heat [...] After this, came a quick, restless, unintermittent toiling of obscure thought [...] Soon these thoughts began to take a form that I could recognise.¹⁴⁾

Basil は当時世間一般に浸透していた自然科学への関心が小説に色濃く反映された例とみることができであろう。

'sensation' を「思考」(thought) や「知力」(intellect) による「認知」(cognition) を伴わない身体的なものとして「思考」(thought) の領域と区別する見方は、'sensation' は本能的、動物的であるがゆえに次元が低く下等であり、一方、「思考」(thought) を伴う「感情」(emotion) は高度なものであるという見方につながる。先に見た当時の芸術におけるセンセーションリズムを批判した 'Real and Ideal Beauty' の記事における、美は「感覚の領域」(the sphere of Sensation) で感知するにとどめずに「知力という奥の神殿」(the inner shrine of the Intellect) で認知すべきとの主張にもこの二層構造的価値観が認められる。これは、動物的な快楽の感知である 'Aesthesis' と、快楽の崇高で敬虔な認識である 'Theoria' という対比構造に基づいた John Ruskin の美の理論にも通じる考え方である。

Collins は *Basil* の中で女主人公 Margaret に対する主人公 Basil の反応を描写する際、'I dwelt over in the first reckless luxury of a new sensation.'¹⁵⁾ や 'This new love that was in me; this giant sensation of a day's growth, was first love.'¹⁶⁾ などのように、幾度となく 'sensation' という言葉を用いているが、Collins が 'sensation' を 'thought' と対比的に用いていることを念頭に入れて読むと、セクシュアリティを匂わそうとする Collins の挑発的な意図を感じ取ることができる。Collins のそのような挑戦的姿勢は、彼が *Basil* の「献辞」に寄せた次の一節からも明らかである。

Directing my characters and my story towards the light of Reality wherever I could find it, I have not hesitated to violate some of the conventionalities of sentimental fiction.¹⁷⁾

Basil は出版当時、「みだらで野蛮なもの」(something rude and barbarous)¹⁸⁾、「底知れぬ退廃」(the lowest abyss of [vice's] degradation)¹⁹⁾、「動物的欲望の詳細」(the details of animal appetite)²⁰⁾ を描いたとして多くの批評家たちの反感を買ったが、それらの論調からは人間の動物的側面への露骨な言及に対する嫌悪感が読み取れる。*The Westminster Review* は次のように非難している。

There are some subjects on which it is not possible to dwell without offence; and Mr.

Collins having first chosen one which could neither please nor elevate, has rather increased the displeasure it exercise, by which his resolution to spare us no revolting details.²¹⁾

主人公 Basil が Margaret の「不貞」の現場を薄い間仕切り越しに聞き知る場面は当時の小説としては十分挑発的なものではあるが、その場面のみならず、作品中、このように人間の性的衝動を彷彿とさせる ‘sensation’ の言葉が幾度となく繰り返し使われていることも、多くの批評家たちの嫌悪感を助長したと言えるであろう。

3. *The Woman in White* における ‘sensation’ とその評価

批評家たちの間で見られた Basil に対する拒絶反応は、1859年、雑誌 *All the Year Round* で連載され社会的センセーションを巻き起こした *The Woman in White* では一変する。Oliphant は ‘Sensation Novel’ と題した1862年5月の *Blackwood’s* の記事で、「すべてが、筋が通り自然で無理がなく、巧みに抑制されている」と、次のように高い評価を示している。

We cannot object to the means by which he startles and thrills his readers; everything is legitimate, natural, and possible; all the exaggerations of excitement are carefully eschewed, and there is almost as little that is objectionable in this highly-wrought sensation-novel, as if it had been a domestic history of the most gentle and unexcited kind.²²⁾

Basil が、扱う題材と表現の露骨さゆえに拒絶されたのに対して、*The Woman in White* は大げさで刺激的な部分を巧みに抑えている点で評価されている。Oliphant は「真のセンセーション効果」(genuine power of sensation)²³⁾ が発揮されている例として二つの場面を取り上げ、それぞれについて、いかに読者が自然な流れの中で真に迫った緊迫感に包まれていくかを説明している。一つは、主人公 Hartright が人気のない夜道で突然背後から全身白づくめの女性に呼びとめられるシーンで、Oliphant は次のように述べている。

Few readers will be able to resist the mysterious thrill of this sudden touch. The sensation is distinct and indisputable. The silent woman lays her hand upon our shoulder as well as upon that of Mr Walter Hartright—yet nothing can be more simple and clear than the narrative, or more free from exaggeration.²⁴⁾

もう一つは、謎めいた白衣の女と女主人公ローラとの「不吉な類似性」(the ominous likeness)²⁵⁾ が Hartright の脳裏に稲妻のようにひらめく瞬間で、Oliphant は次のように述べ、前者同様に状況設定の自然な成り行きの中で生まれる紛れもない緊迫感を評価している。

The scene itself is as tranquil as can be conceived—two young people indoors in a lighted room, with a pretty girl outside passing and repassing the uncovered window—yet the sensation is again indisputable. The reader's nerves are affected like the hero's. He feels the thrill of the untoward resemblance, an ominous painful mystery.²⁶⁾

'sensation' の単語そのものの使用に関して *The Woman in White* を見ていくと、偶然にもそれらの多くが Oliphant が指摘する上記二つの場面に挟まれる形で用いられているのが分かる。注目すべきは、*Basil* で用いられられていた 'sensation' が身体的な意味合いを帯びていたのに対して、*The Woman in White* では、'a strange sensation'²⁷⁾、'a confused sensation'²⁸⁾、'a sensation oddly akin to the helpless discomfort'²⁹⁾ など、心理的な感情を表しており、*Basil* の 'sensation' が主人公のセクシュアリティを彷彿とさせていたのに対し、*The Woman in White* では主人公の漠然たる不安を体現していることである。Oliphant の言う「真のセンセーション効果」(genuine power of sensation) は、これら作品の序盤に散りばめられた 'sensation' の言葉そのものによっても巧みに演出されているのである。

4. 社会的に受け入れられる 'sensation' とは

1852年の *Basil* 出版から1859年の *The Woman in White* 連載にかけての期間は、Collins が Charles Dickens 編集の雑誌 *Household Words* のスタッフとして執筆していた時期にあたる。Dickens は中産階級向けの雑誌の編集責任者としての立場から、常日頃 Collins の道徳に対する挑戦的な姿勢を警戒していたと言う。例えば Dickens は1858年9月24日の副編集長 W. H. Wills への手紙で「Collins の記事によく目を通して中産階級読者を不必要に刺激するような箇所が残らないように」と指示を与えている³⁰⁾。Collins の伝記の中で William Clark は、「副編集長を通して、または Dickens 本人から、間接にも直接にも些細な点に及ぶ指令書が飛び交い、原稿を即座に却下されたり微妙な変更を指示されたりすることを通して、Collins は編集責任者としての Dickens の絶対的決定権を否が応でも感じ取った」と述べる一方で、「Dickens の意図をすぐに汲み取り、いかなる方向にも柔軟に対応する術を身につけていった」とも述べている³¹⁾。*Basil* におけるラディカルで直接的な 'sensation' が、*The Woman in White* において、Oliphant が「すべてが、筋が通り自然で無理がない」と評価するような「節度ある」

‘sensation’へと変貌を遂げている背景には、*Household Words*の後継雑誌としてエンターテインメント性を重視して世に打って出た*All the Year Round*の目玉連載小説としての性格が大いに影響したと言えよう。

「新奇さ」(novelty)を追い求める風潮が1850年代すでに社会的現象となっていて、それに対して、センセーション小説流行による社会的熱狂に警鐘を鳴らした1860年代初頭の議論と同様の論調が展開されていたことは先に見たとおりだが、その一方で1850年代末期になると、人間の本質的な側面を擁護する主張が見られるのも事実である。本論冒頭に見た1859年1月の‘Popular Literature – the periodical press’と題した記事でDallasは「動物的部分は自ずと出てくるものであり、我われはそれを振り払うことは不可能である」(We cannot shake off the animal. The animal asserts itself)³²⁾と主張し、「美は『感覚の領域』ではなく『知力という奥の神殿』で感じとるべきだ」という先に見た1853年12月の‘Real and Ideal Beauty’の見解と正反対となるような論を展開している。そしてDallasは「思索(thought)偏重の社会で人が思索(thought)を離れて感覚的なもの(sensation)を求めるようになるのは人間の必然である」³³⁾とし、次のように本論冒頭で紹介した一節で論を締めくくっている。

[...] not because we are less intellectual, but because it is a necessity of our existence [...] we should fly thought, and cultivate sensation.³⁴⁾

1850年代後半にかけて「思考」擁護と「感覚」擁護の価値観が混在する中、1859年8月の*Blackwood's*に、*The Woman in White*の‘sensation’の特性に通じるような絵画の論評が掲載されている。1859年のRoyal Academyの出展作品を論評したこの記事で筆者のJ. B. Atkinsonはイギリス絵画の当時の状況を次のように述べている。

Wild eccentricity – even the unaccustomed strangeness of gross mannerism – may for the moment attract the public gaze, but in the end we again find devotion centre round the names which have long been worshiped – admiration again revert to those works of the old true English school.³⁵⁾

批判の対象となっているのは、ラファエロ前派の影響を受けた作品の数々であり、とりわけJ.E.Millaisの“Vale of Rest”に関してAtkinsonは、「確かに力強い作品であるが、その力強さは嫌悪からくるものである」(undoubtedly a work of power, but it is the power of repulsion)³⁶⁾と述べ、新奇さゆえに話題を呼んだ他の作品も「結局は不快感を与え嘲笑の的となって終わった」(only to incite disgust or provoke to ridicule)³⁷⁾と断じている。その一方で、

彼はいくつか評価に値する作品を挙げているが、注目すべきはその評価理由である。

[...] the new school has been productive of some benefit. Even the present Exhibition, given up to extravagant excess, contains some works of comparative moderation, marked by that truthful, close study of nature, which necessarily brings commensurate reward.³⁸⁾

ラファエロ前派的な「どぎつさ」「けばけばしさ」が適度に中和されている例として挙げたある絵に関して Atkinson は次のように述べている。

Mr. Knight's "Barley Harvest on the Welsh Coast" is certainly among the more praiseworthy works executed under so-called pre-Raphaelite influence, careful and thoughtful throughout; the detail of rock, field, and wave kept duly subordinate to an unobtrusive general effect.³⁹⁾

ラファエロ前派独特の「過度な細部描写」(excess of detail)⁴⁰⁾を「直接目に見えないかたち」(not actually to be seen)⁴¹⁾にとどめていることが高く評価されているようであるが、ここで先に見た Oliphant の *The Woman in White* の評価を思い返してみると、ある共通した評価基準が見えてくる。Oliphant は先に見た引用で、「大げさで刺激的な部分がすべて巧みに抑制されていて」(all the exaggerations of excitement are carefully eschewed)、センセーション小説でありながらまるで穏やかでごくありふれたドメスティック小説かのようにであると述べていた。両者に共通するのは「センセーショナル」な要素が直接目で見える形で主張しないことが重要であるという認識である。Oliphant は別の個所でも次のように述べている。

The effect is pure sensation, neither more nor less; and so much reticence, reserve, and delicacy is in the means employed, there is such an entire absence of exaggeration or any meretricious auxiliaries, that the reader feels his own sensibilities flattered by the impression made upon him.⁴²⁾

5. おわりに

以上見てきたように、'sensation' という言葉は、1860年代初頭に見られたセンセーション小説の爆発的流行に先駆けて、1850年代を通して様々な領域で社会的にトピカルな用語と

なっていた。‘sensation’の扱いが当時の価値観、モラルとの微妙な関係の上に成り立っていたことは、*Basil*と*The Woman in White*の社会的評価の決定的な違いが如実に物語る。*The Woman in White*の大反響および、その後のセンセーション小説の流行を導いたのは、*Basil*執筆に際して「しきたりに背くことも厭わない」(I have not hesitated to violate some of the conventionalities)と挑戦的な姿勢を示していたCollinsが、*The Woman in White*において、「新奇さ」(novelty)への時代の要求を敏感に感じ取りながらも、その一方で時代の限度をも慎重に見極めた結果であったと言えよう。

註

1. Katherine Tillotson, "The Lighter Reading of the Eighteen-Sixties," in "Introduction" to *The Woman in White*. By Wilkie Collins (Boston, Mass: Dover, 1969), xii.
2. Margaret Oliphant, "Modern Novelists – great and small," *Blackwood's Edinburgh Magazine* 77 (May 1855): p.566.
3. E.S.Dallas, "Popular Literature – the periodical press," *Blackwood's Edinburgh Magazine* 85 (Jan. 1859): p.111.
4. William Lucas Collins, "*Adam Bede*," *Blackwood's Edinburgh Magazine* 85 (Apr. 1859): p.491.
5. George Eliot, *Adam Bede* (1859. Oxford: Oxford U.P., World's Classics, 1996), p.513.
6. R. H. Petterson, "Real and Ideal Beauty," *Blackwood's Edinburgh Magazine* 74 (Dec. 1853): pp.754-55.
7. J. B. Atkinson, "Manchester Exhibition of Art-Treasures," *Blackwood's Edinburgh Magazine* 81 (Aug. 1857): pp.165-66.
8. Lewesが1850年代に*Blackwood's*に寄せた生理学に関連した記事は以下の通りである。
 - "Metamorphoses (Part I)," (May 1856).
 - "Metamorphoses (Part II)," (Jun. 1856).
 - "Metamorphoses (Part III)," (Jul. 1856).
 - "Sea-side studies (No. I)," (Aug. 1856).
 - "Sea-side studies (No. II)," (Sep. 1856).
 - "Sea-side studies (No. III)," (Aug. 1856).
 - "New sea-side studies (No. I): the Scilly Isles," (Jun. 1857).
 - "New sea-side studies (No. II): the Scilly Isles," (Jul. 1857).
 - "New sea-side studies (No. III): Jersey," (Aug. 1857).
 - "New sea-side studies (No. IV): Jersey," (Sep. 1857).
 - "New sea-side studies (No. V): Jersey," (Oct. 1857).

- "Phrenology in France," (Dec. 1857).
- "Hunger and thirst," (Jan. 1858).
- "Food and drink (Part I)," (Mar. 1858).
- "Food and drink (Part II)," (Apr. 1858).
- "Food and drink (Part III)," (May 1858).
- "Blood," (Jun. 1858).
- "Circulation of the blood," (Aug. 1858).
- "Respiration and suffocation," (Sep. 1858).
- "Animal heat," (Oct. 1858).
9. Wilkie Collins, *Basil* (1852. Oxford U.P., World's Classics, 1990), p.32.
10. Collins, *Basil*, p.44.
11. Collins, *Basil*, p.55.
12. Collins, *Basil*, p.158.
13. Collins, *Basil*, p.169.
14. Collins, *Basil*, p.169.
15. Collins, *Basil*, p.38.
16. Collins, *Basil*, p.42.
17. Collins, *Basil*, xxxix.
18. "Esmond and Basil," *Bentley's Miscellany* 32 (Dec. 1852): p.586.
19. "A Trio of novels," *Dublin University Magazine* 41 (Jan. 1853): p.79.
20. "The Progress of Fiction as an Art," *The Westminster Review* 60 (Oct. 1853): p.361.
21. "The Progress of Fiction as an Art," p.361.
22. Margaret Oliphant, "Sensation Novel," *Blackwood's Edinburgh Magazine* 91 (May 1862): p.566.
23. Oliphant, "Sensation Novel," p.574.
24. Oliphant, "Sensation Novel," p.571.
25. Wilkie Collins, *The Woman in White* (1859-60. London: Penguin Books, 1985), p. 86.
26. Oliphant, "Sensation Novel," p.571.
27. *The Woman in White*, p. 57.
28. *The Woman in White*, p. 57.
29. *The Woman in White*, p. 59.
30. P.C.Lehmann (ed), *Charles Dickens as Editor* (London: Smith Elder, 1912), p. 247.
31. William M. Clarke, *The Secret Life of Wilkie Collins* (1988. Stroud: Alan Sutton, 1996), p. 66.
32. Dallas, p.111.
33. Dallas, p.111.
34. Dallas, p.112.

35. J. B. Atkinson, "London Exhibitions – conflict of the school," *Blackwood's Edinburgh Magazine* 86 (Aug. 1859): p.127.
36. "London Exhibitions – conflict of the school," p.132.
37. "London Exhibitions – conflict of the school," p.127.
38. "London Exhibitions – conflict of the school," p.130.
39. "London Exhibitions – conflict of the school," p.130.
40. "London Exhibitions – conflict of the school," p.130.
41. "London Exhibitions – conflict of the school," p.130.
42. Oliphant, "Sensation Novel," p.572.

引用文献

- Atkinson, J. B. "London Exhibitions – conflict of the school," *Blackwood's Edinburgh Magazine* 86 (1859): 127-142.
- . "Manchester Exhibition of Art-Treasures," *Blackwood's Edinburgh Magazine* 82 (1857): 156-176.
- Clarke, William M. *The Secret Life of Wilkie Collins*. Stroud: Alan Sutton, 1996.
- Collins, Wilkie. *Basil*. 1852. London: Oxford University Press, World's Classics, 1990.
- . *The Woman in White*. 1859-60. London: Penguin Books, 1985.
- Collins, William Lucas. "Adam Bede," *Blackwood's Edinburgh Magazine* 85 (1859): 490-504.
- Dallas, E. S. "Popular Literature – the periodical press," *Blackwood's Edinburgh Magazine* 85 (1859): 96-112.
- Eliot, George. *Adam Bede*. 1859. London: Oxford University Press, World's Classics, 1996.
- "Esmond and Basil," *Bentley's Miscellany* 32 (1852): 576-586.
- Lehmann, P. C. ed. *Charles Dickens as Editor*. London: Smith Elder, 1912.
- Oliphant, Margaret. "Modern Novelists – great and small," *Blackwood's Edinburgh Magazine* 77 (1859): 554-568.
- . "Sensation Novel," *Blackwood's Edinburgh Magazine* 91 (1862): 564-584.
- Petterson, R. H. "Real and Ideal Beauty," *Blackwood's Edinburgh Magazine* 74 (1853): 726-755.
- "The Progress of Fiction as an Art," *The Westminster Review* 60 (1853): 342-374.
- "A Trio of novels," *Dublin University Magazine* 41 (1853): 70-79.

(はしの・ともこ 外国語学部講師)